

# CALL教材の組み合わせによる学習効果

日大生産工 中條清美  
日大生産工 内堀朝子

## 1 はじめに

我が国の約半数の大学が英語授業にコンピュータを導入している。しかし、外国語学習に関するCALLの研究報告は極めて少なく、深谷<sup>1)</sup>の調査によると1976年から2000年までに教育工学雑誌に掲載された論文541件の中で、英語教育関係のキーワードをもつ論文はわずか5件に過ぎない。

また、坂元ら<sup>2)</sup>はCALLシステムの有効性を示すには「例えばTOEFLやTOEICなどの客観テストや授業分析によって行なわれるべきである」と主張しているが、客観的数値によるCALL教育の有効性を示した事例は、さらに少ない。

現場でCALLを担当する外国語教師は、どのような学生を、どのようなCALL用教材で、どのように指導すれば、「実際に」どれほどの効果が上がるのかということを経験的に判断し、授業設計を行なわなければならない。そのためには、CALLの授業による教育効果に関して、客観的データに基づく実証的研究・調査が必要である。

本研究は、2007年の「大学全入時代」を視野に入れ、今後増加するであろうと予測される英語初級レベル学習者を指導対象とし、リスニングCD-ROM教材に、他のCD-ROM教材を組み合わせることによってCALL教育の効果を高め、その結果を客観テストの点数で検証した結果について報告する。

## 2 CALLの教育効果向上に向けた要因分析

まず、質問紙、および TOEICテストを使って、当該学習者の英語学習の必要性和要望、英語力レベルを調査した。次に、CALL指導の効果をより高めるために、識者の指摘、および筆者らの指導者としての経験から学習者のニーズをさらに詳細に分析した。

### 1) 必要性和要望

英語は好き(49%)、将来は海外(英語圏)で仕事をしてみたい(60%)、英語の資格試

験は重要(80%)、と多くの学習者が英語学習の必要性を感じている。一方、「英語力に自信がある」という学習者はわずか2%であった。とりわけ「聞く・話す」に対しては、「読む・書く」よりも自信が低いことが判明した。

### 2) 英語力レベルの現状と目標

現状のTOEIC推定スコアは平均230点であった。大学卒業までに取りたい目標スコアの500点以上との間には大きなギャップがある。

### 3) 語彙力の不足

TOEICの受験には少なくとも3,700語程度の語彙が必要であるが<sup>3)</sup>、現実の学習者の習得語彙数は、高校までの英語教科書を完璧に習得した場合でも3,000語程度にすぎない<sup>4)</sup>。語彙知識を効率的に拡大していく必要は明白である。

### 4) 文法力の問題

高校までの文法指導はいわゆる学校英文法の枠組みに基づいており、実際に使用される英語表現に頻出する文法項目に重点を置いたものではない。そのため、実用的コミュニケーション能力に必要な文法項目を調査し、その結果に基づいた文法指導を行なう必要がある。

### 5) 学習者支援のための継続的動機付け

「高校の英語の授業は面白かった」と答えた学習者は13%にすぎなかった。英語学習を面白いと思わせ、内発的動機付けを高めることが重要である。とくに初級学習者には、達成感から生まれる自信を育成する必要がある。

### 6) 学習時間の問題

外国語の習得には膨大な学習時間を要する。例えば、千田ら<sup>5)</sup>はTOEICの300点から400点の向上に必要な研修時間を200時間と予測している。

限られた教育機会の中で時間不足を補うためには、自己学習の時間を増やす必要がある。しかしながら、その方策として、高価なCALLシステムを導入したものの、自主的に学習を継続した学生は大学全体でわずか0.8%だったという望月ら<sup>6)</sup>の報告が示すように、教材を与えただけでは学習者を学習活動に方向付けることはできない。何らかの方法で自己学習の時間を増やすための「授業設計」と「学習支援」が必要である。

### 3 指導実践

以上の現状及び問題点を踏まえ、英語初級学習者が、実用的な英語コミュニケーション能力を習得できるように、自己学習の拡大、学習の効率化、継続的な動機付けを考慮したCALL授業の指導実践について述べる。

限られた時間のなかで行なう大学の英語教育の現状では、一般的な英語力育成を目指すEGP (English for General Purposes) の英語教育と、ビジネスなどに目的を限定したESP

(English for Specific Purposes) の英語教育を区別して考え、両者を有機的に組み合わせて英語教育を行なう必要があるといわれる。

そこで、本指導実践では以下の4種の教材を使用した。

EGP用リスニング教材「Listen to Me!」シリーズの初級用教材「First Listening」を用いた。「三ラウンド・システム」と呼ばれる指導理論に基づいて開発された本教材は、既に多くの実証的研究で高い効果が報告されている。教材は6ユニットからなり、半期に適した分量で、当該学習者の英語初級レベルに対応している。

ESP用 (TOEIC) 語彙学習教材には、学習者のレベル、要望、そして、TOEICスコア向上という学習者のニーズを考慮した語彙選定を行ない、音声、文字、映像情報を使って語彙を効果的に学習できるように独自開発したCD-ROM教材を使用した。本教材は半期に200語とその用例400種を学習できるものである。

First Listening に依拠した各ユニット20問の英問4択「内容理解テスト」である。難易度の高くない課題によって「やればできる」という成功体験を重ねるためのリスニングテスト教材である。

First Listening に依拠した各ユニット20問の「Words & Phrasesテスト」は正確に聞いて正確にタイプするという課題である。少し難易度の高い「挑戦してみよう」という気持ちを引き出すテストである。

以上の教材を表1に示した4通りに組み合わせて4組の学習者に半期間指導した。なお、使用教材の組み合わせは、CALL教室の利用状況、教材の入手事情等によって不可避免的に生じた。

表1 CALL教材の組み合わせ

A組: リスニング教材
B組: 語彙教材
C組: リスニング教材 + 語彙教材 + 内容理解テスト
D組: リスニング教材 + 語彙教材 + 内容理解テスト + Words & Phrasesテスト ~

### 4 結果

指導効果の検証はTOEICスコアの上昇量によって行なった。リスニング教材のみを学習したA組では、TOEICテストの結果に有意な得点上昇は観察されなかった。

一方、語彙教材のみを学習したB組の得点上昇には有意な差が得られた。

C組はリスニング教材とTOEIC向け語彙学習教材に、内容理解テストを加えたものであり、58.8点という得点上昇が得られた。

D組はC組の教材にWords & Phrasesテストを加えたもので、得点上昇は80.3点であった。

### 5 まとめ

やる気を引き出し、学習に向かわせることが難しいといわれる初級レベルの大学生学習者を対象として半期間指導を行なった結果、4種のCALL教材の個別、及び、組み合わせによる教育効果を実証することができた。

講演では指導実践の結果について客観データを検討しながら考察を行なう。

### 参考文献

- 1) 深谷哲(2003)「日本における教育工学と第二言語教育」, 日本教育工学雑誌, 27, 3: 225-232
- 2) 坂元昂, 山田恒夫, 伊藤紘二 (2003)「第二言語学習とその支援に関する教育工学研究」, 日本教育工学雑誌, 27, 3: 217-223
- 3) Chujo, K. and Genung, M. (2004) Comparing the Three Specialized Vocabularies Used in 'Business English,' TOEIC, and British National Corpus Spoken Business Communications, *Practical English Studies*, 11: 49-63.
- 4) Chujo, K. (2004) Measuring Vocabulary Levels of English Textbooks and Tests Using a BNC Lemmatised High Frequency Word List, *English Corpora under Japanese Eye*, Amsterdam: Rodopi, 231-249
- 5) 千田潤一, 鹿野晴夫 (2001)『この1冊ですべてが解るTOEICテスト』, 旺文社
- 6) 望月正道, 片桐一彦 (2003)「ネットアカデミー利用実態報告: 平成14年9月 平成15年1月」, 麗澤大学紀要, 76, 175-185